

またふたたびの「黎明期」

前田 武志

(科学技術振興機構)

2009 年、国内外の光学界は発表件数も参加者も減少傾向であった。世界同時不況により光産業の規模が縮小し、新型ウイルスが追い打ちをかけたためと説明されるが、それ以前から光ディスクの分野では、「閉塞感」が漂っていた。2008 年に 35 年勤めたメーカーを定年退職した際、私は「研究開発の黎明期に入社し、輝かしい時期を経験して定年を迎える幸運」を羨まれたものである。

しかし、実際に光学界は閉塞しているのだろうか。ディスプレイ、太陽電池、光通信などの分野は比較的元気であるし、参加者を増加させた学会もあった。アジアの国々の発表件数の増加とレベルの向上はめざましいものがある。また、新分野の発表が増え、これは光の研究開発の潮流が変わりつつあることを示している。その方向が、環境、エネルギー、医療技術などであることは今やはっきりしてきたが、具体的なテーマが何であるかはまだ見えていない。まさにこの状況は、「黎明期」ではないか。

とすれば、研究者は再び「黎明期」にめぐりあわう幸運に浴していることになる。「いい時代を生きた」当時の私たちと同じである。もちろん違いはある。そのひとつが、当時の研究者が何も知らず何も持たなかったのに対し、今の研究者はあまりにたくさん研究成果を手にし、知っているということである。これは、ある意味不幸であるかもしれない。なぜなら、多くの知識は先入観や自己規制を生み、向こう見ずな冒険心を失わせ、何よりも新しく発見する喜びを減らすからである。研究開発が始まった当時の私たちは、「知りたい」「面白い」「できた」それだけで毎日動いていたような気がする。

しかし、知ってしまったものを今更どうすればいいのか。私の提案はいたって簡単である。少し見方を変えればいいのである。ほんのわずかだけ角度を変えれば、同じものが全く別の体系に見えてくる。では、見る角度を変えるにはどうするか。違った研究分野の人と接触する機会を持つことを、私は勧めたい。

現在、私は、かつての光ディスク一筋だった生活とうって変わり、科学技術振興機構 (JST) の特許調査員としてさまざまな研究分野に触れることになった。いろいろな分野の研究者と面談するたび、彼らの話に触発されて、驚くほどアイデアが生まれてくるのである。ただ惜しむらくは、そのアイデアを結実させる場から離れていることである。そこで現役の研究者に言いたい。「専門の枠を超えて、異分野の研究者と交流してみよう。」きっと得るものは多いと確信する。